

青柳いづみこさんの『我が偏愛のピアニスト』を読む

高井 延幸

岡田さんの演奏会にもよくお見えになるピアニストの青柳いづみこさんが、昨年9月中央公論新社から『我が偏愛のピアニスト』という素敵な本を上梓された。青柳さんはドビュッシーの演奏および研究では第一人者の音楽家だが、エッセイストとしてもつとに著名な方である。

これは音楽誌『ムジカノーヴァ』に連載された10人の日本人ピアニストとのインタビューに加筆の上1冊の本にまとめたもので、最初に岡田博美さんがとり上げられている。これを読むと、岡田さんの音楽が多角的に丁寧に描き出されていて、日頃漠然と感じている岡田さんの演奏の素晴らしさが整然と分析され、極めて明瞭にわかるような気になる。なるほど、一流の音楽家というのは、このように音楽を聴き、感じ、分析するものなのかと感心するばかりである。

今や伝説的なリサイタルになりつつある2008年2月29日トッパンホールで行われた「ゴルトベルク変奏曲」演奏の紹介から入り、あの難曲アルベニスの「イベリア」と岡田さんとのかかわり合いや、ドビュッシー、矢代秋雄、デュティユーの曲の演奏技法などについて、インタビューをもとに独自の分析が加えられ、岡田さんの演奏の本質が余すところなく書き出されている。

また、岡田さんがどのようにして子供時代を過ごし、長じて森安芳樹、マリア・クルチオという名伯楽に出会い、ピアニストとしていかに天賦の才能を伸ばし成長してきたか、そして現在どのような生活環境にあるのかが、エピソードも交えながら実的に描かれているので、岡田さんの音楽が立体的に浮かび上がってくるような思いがする。

そして最後に、世間からはピアノ一筋のように思われている岡田さんの隠れた一面も紹介して、そこからとった「ドラえもんも好きです」という岡田さんの言葉をこの章の標題にしている。エスプリに富み、なんとも心憎いタイトルではないか。

この本には、他に9人のピアニストが書かれている。演奏を聴いたことがある人もいれば、初めて名前を聞く人もいる。ただ、どのピアニストもその特徴があまねく描かれていて、青柳さんの音楽を聴く耳の確かさと、そして何より、このような高い技量と見識を持った芸術家には珍しく、それぞれの演奏家に対する愛情と心の広さを感じさせる。

この本の困るところは、どのピアニストもあまりに魅力的に書かれているので、熱烈な岡田ファンといえどもちょっと浮気をして、全ての人の演奏をもっとつぶさに聴いてみたいという誘惑にかられることだろうか。